

# 研究者等の国内移動等に関する調査

平成22年11月

# 目 次

- 「科学技術人材に関する調査分析」(2009年3月) …………… 1  
科学技術政策研究所
- 「我が国の科学技術人材の流動性調査」(2009年1月) …………… 4  
科学技術政策研究所

# 「科学技術人材に関する調査」(2009年3月) 科学技術政策研究所

## ～研究者の流動性と研究組織における人材多様性に関する調査分析～

### 調査概要

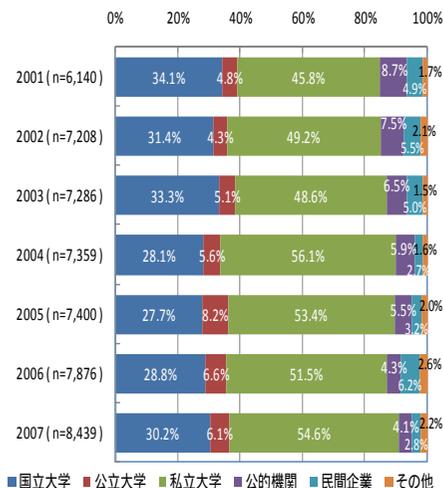
調査対象：国内の自然科学系の研究を行う以下の研究機関に所属する研究者(調査時期：2008年)

- 博士課程を有する国公立大学(248 大学)
- 大学共同利用機関(11 機関)
- 独立行政法人(28 機関、160 組織)、国立試験研究機関(22 機関、26 組織)
- 公設試験場(355 機関)
- 財団法人および社団法人(169 機関)

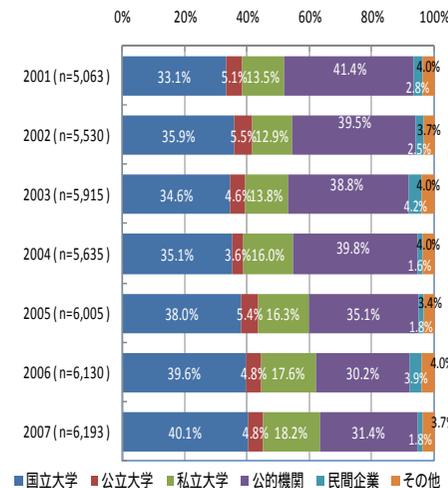
### 転出元セクター別転出先割合の推移

- 大学からの転出者の転出先として最も大きな割合を占めているのは私立大学である。
- 公的機関からの転出者の転出先のうち、国立大学法人、私立大学の占める割合が増大しており、逆に公的機関の占める割合が減少している。

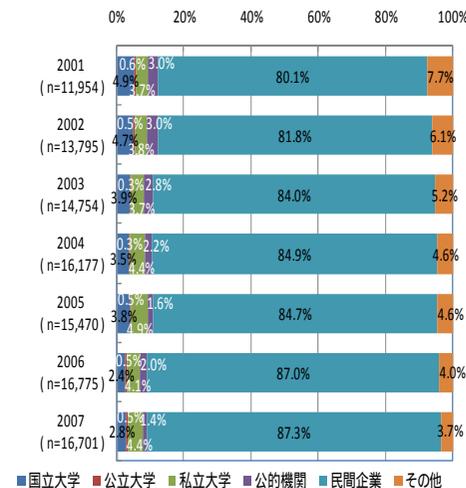
転出元：大学等



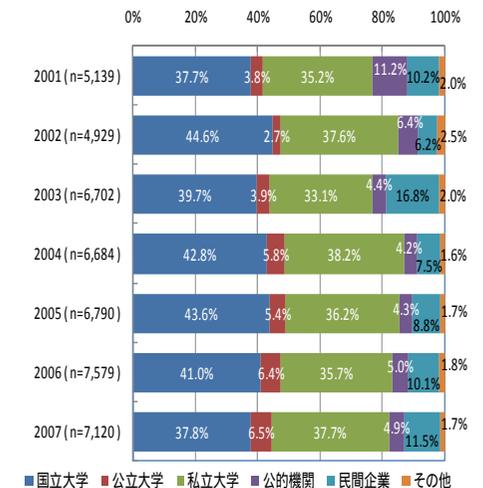
転出元：公的機関



転出元：民間企業



転出元：その他(大学等、公的機関、企業等以外)



### 転出元セクター別転出先割合の推移

注1：n値は当該年度の転出者総数

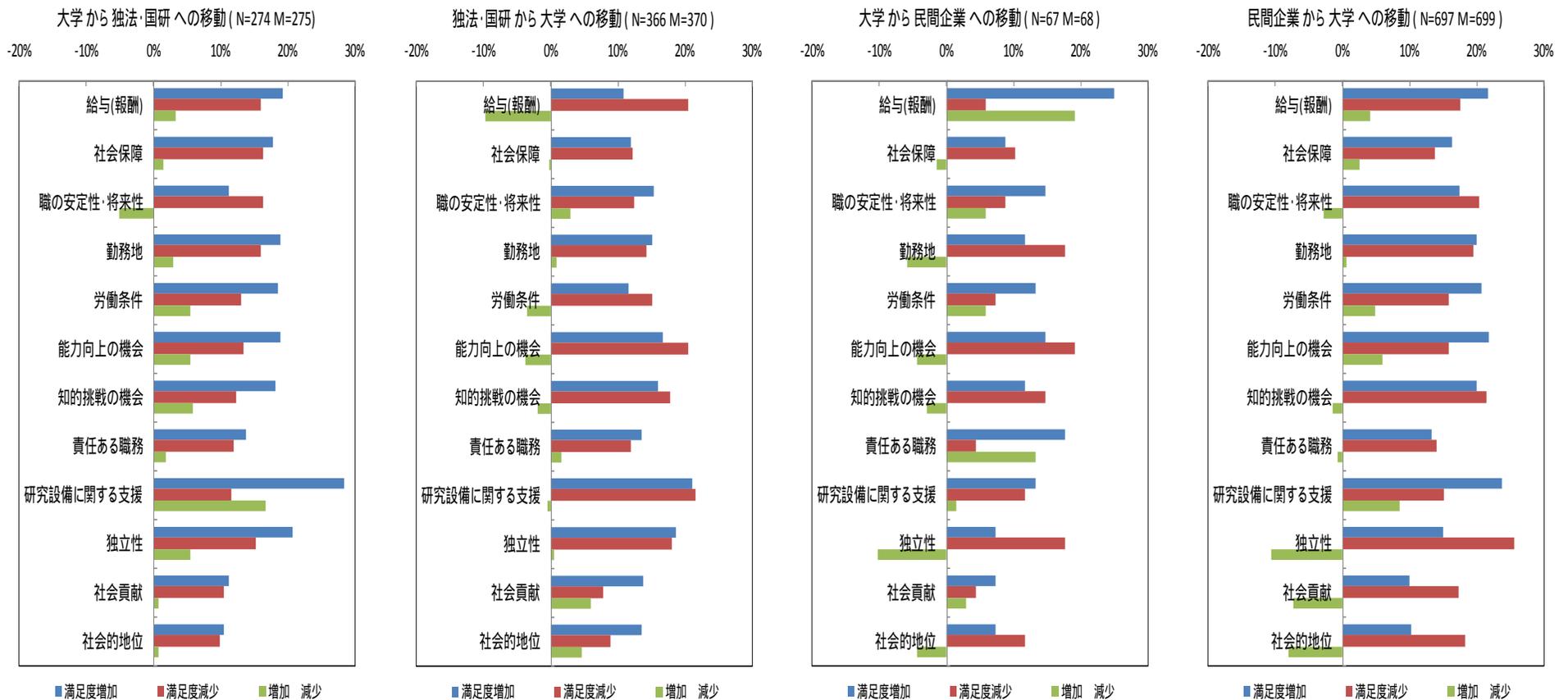
注2：公的機関は特殊法人・独立行政法人、国営研究機関、公営研究機関(公設試験場等)を含む

# 「科学技術人材に関する調査」(2009年3月) 科学技術政策研究所

## ~研究者の流動性と研究組織における人材多様性に関する調査分析~

### 移動パターンと満足度の関係(国内機関間の移動)

- 大学から独立行政法人・国立試験研究機関への移動の際に満足度が増加している項目が多い。逆の移動では、社会貢献、社会的地位は向上するものの、給与、能力向上の機会等の項目で満足度の減少が見られる。



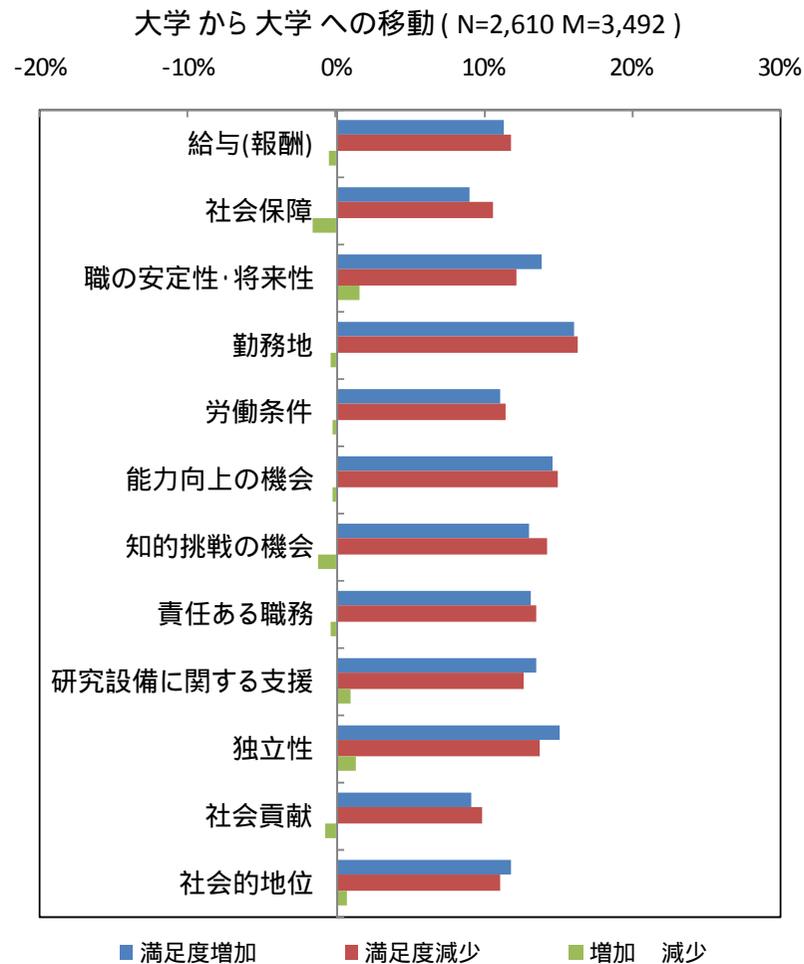
移動パターン別満足度の変化(国内機関間の移動)

# 「科学技術人材に関する調査」(2009年3月) 科学技術政策研究所

## ~研究者の流動性と研究組織における人材多様性に関する調査分析~

### 移動パターンと満足度の関係(大学間の移動)

- 大学間の移動では、全体として満足度に大きな増減は見られない。



移動パターン別満足度の変化(大学間の移動)

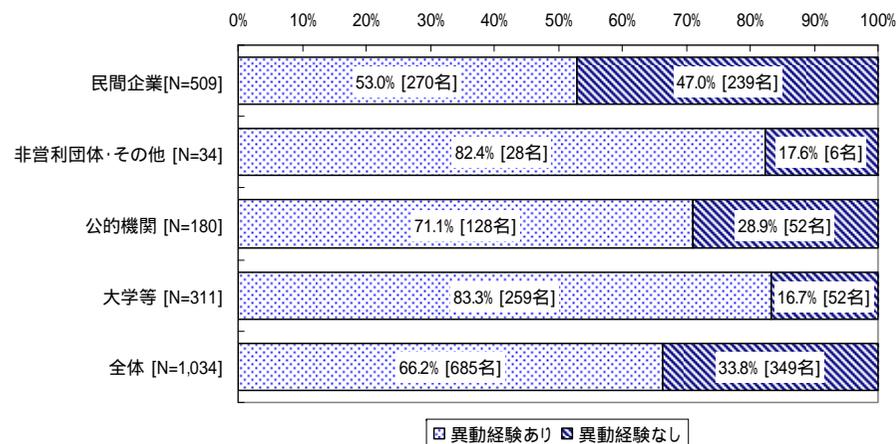
# 「我が国の科学技術人材の流動性調査」(2009年1月) 科学技術政策研究所

## 調査概要

調査対象：日本で研究活動を行っている2,000名の研究者(調査時期：2008年)  
 (有効回答者数：1,036名)  
 ・セクター別 民間企業509名、大学等311名、公的機関180名、  
 非営利団体・その他36名  
 ・年齢構成 24歳以下 0.1%、25~34歳 10.3%、35~44歳 28.5%  
 45~54歳 34.7%、55~64歳 22.2%、65歳以上 4.1%

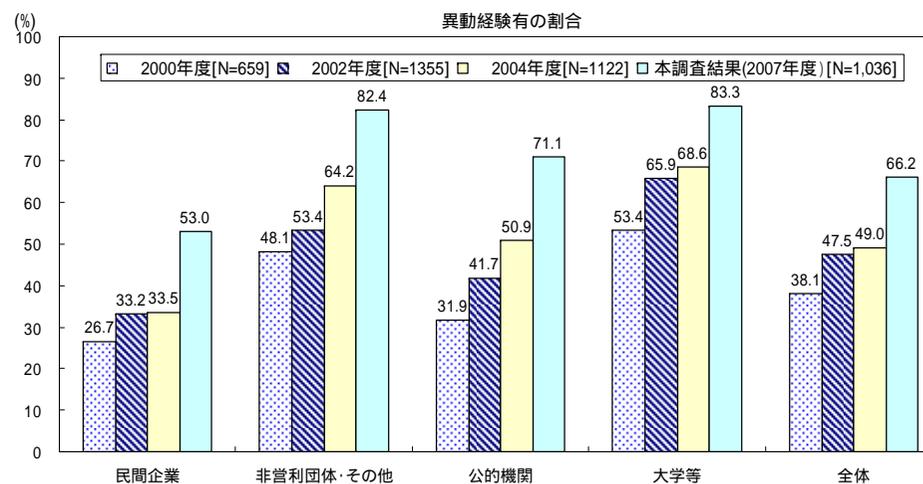
## キャリア異動経験の有無(セクター別)

(対象：すべての研究者)



## キャリア異動経験の有無(セクター別)：経年変化

(対象：すべての研究者)

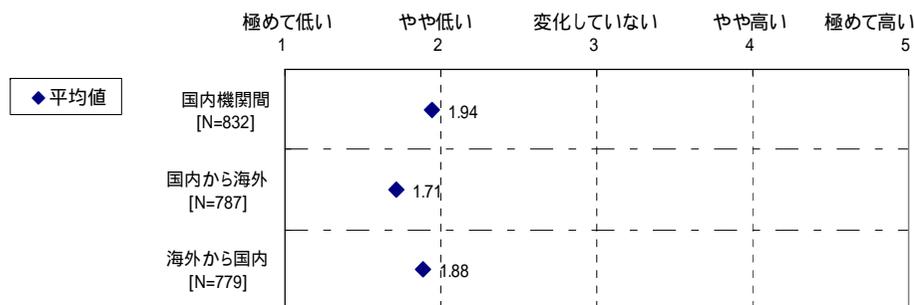


文部科学省「我が国の研究活動の実態に関する調査報告」(平成16年度)より作成

# 「我が国の科学技術人材の流動性調査」(2009年1月) 科学技術政策研究所

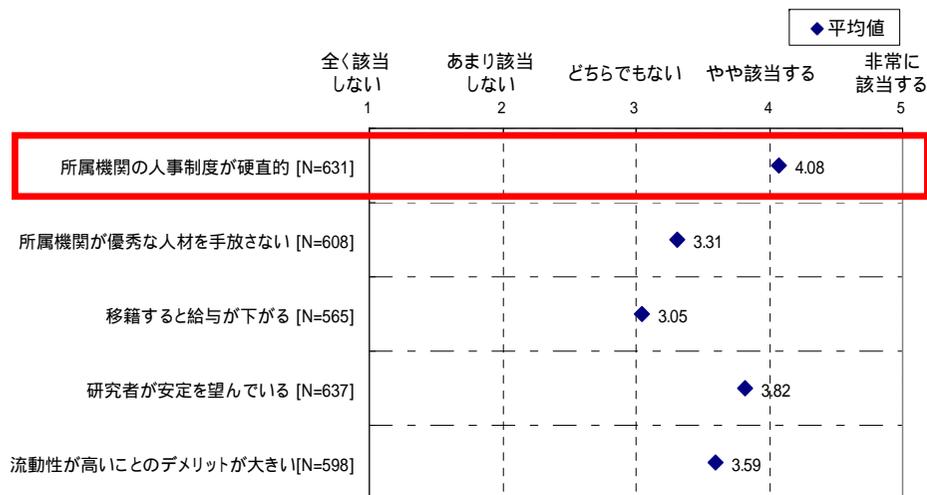
## 日本における流動性と他先進諸国との比較

(対象:すべての研究者)



## 国内機関間の流動性が先進諸国に比べ低い理由

(対象:日本の国内の機関間での流動性が他の先進諸国と比べて「やや低い」「極めて低い」と思う研究者)



## 日本において研究者の流動性が増加した際のメリット

(対象:すべての研究者)

